



# 筑紫女学園大学リポジット

A Prelude to Grand Power Chauvinism :  
Focusing on the Representation of Joseon  
Dynasty during the Edo Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 羅, 義圭, LA, Euikyu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/991">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/991</a>

# 大国主義への序曲 —江戸時代の朝鮮表象に焦点を当てて—

羅 義 圭

## A Prelude to Grand Power Chauvinism —Focusing on the Representation of Joseon Dynasty during the Edo Period—

Euikyū LA

### はじめに

1990年代は元「従軍慰安婦」のハルモニ<sup>1</sup>が東京裁判に訴訟を起こしたきっかけで、それまで実証主義に基づき戦争責任が語られてきた歴史に大きな終止符を打つ大事件となった。そこから日本国内では「証言の時代」が到来し、戦争・戦後責任について日韓の間に溝がより一層深まったと言えるだろう。

しかし21世紀になってから2002年日韓ワールドカップ共同開催とともに、日韓関係は新たな局面に向かった。そこから日韓関係を友好的関係に編みなおすために、江戸時代に光を当てて、「朝鮮通信使」を通して両国間の関係改善の労いが窺われる。現在は民際交流の活性化のために、両国間で「朝鮮通信使」は大きな役割を果たしていることは否定できないだろう。一方、この「朝鮮通信使」には両面性が孕まれていることも注意深く考えなければならない。「善隣友好」をあまりにも強調した揚げ句、戦後以降できるだけ日本では避けて通りたいという歴史問題が浮上する度、両国の国民は感情に走ってしまい被害者の心に傷つける発言が頻繁に続出する。その問題性を改めて考えるためにも、「朝鮮通信使」を再考察することはとても大事だと思われる。

当時、豊臣秀吉の朝鮮侵略により、日朝間の外交断絶がしばらく続く中で、徳川家康が政権を掌握してから、朝鮮通信使を通してようやく両国間の外交が再開を迎えた。江戸時代を通して12回来日した朝鮮通信使は、表向きには日朝間の「和平」「善隣友好」の証として、その文化交流の歴史的意義が高らかに論じられてきた。反面、徳川家康政権と朝鮮との外交では国王称号や捕虜人刷還問題等が解決せず、交流に大きな問題を孕んでいたことも事実である。こうした関係が

日朝関係に大きな悪影響を及ぼしたことは想像に難くない。のちに、その問題が明るみになったのが新井白石の時である。白石は朝鮮通信使との交流のなかで大きな経済的負担を訴え、その交流を大幅に減縮することに踏み出す一方、雨森芳州は朝鮮に渡って、みずから朝鮮語を学び他者との関係を厚くすることに努めた。

本研究では、こうした対立的な立場の二人を取り上げ、両者は、他者（＝朝鮮）とのかかわりでのどのようなプロセスを持っていたのかに焦点を当てて、考察する。なぜならば、日本が歴史を語る時、江戸時代と近代を断絶史観としてよく語ることに異議を申し出て、そこから明治になってからも朝鮮に対しての優越感は脈々に流れていたことを提示したいからである。さらに、もっと重要な点は、他者との関係性をどのように築くべきかを考えることである。他者との関わりの中で、自己変革を伴わないまま自己保存から出発することは結局他者をモノ化（＝植民地化）することにつながると思われる。そこからは他者との友好的関係を構築することはとても難しいのである。

## 1. 東アジアの秩序―「中華思想」

はじめに、東アジアの歴史的情勢を見ていきたい。

天命をうけて世界の中心に君臨する中国皇帝が、その徳を募って朝貢してくる周辺諸国の首長に爵位を与え君臣関係を結ぶ。こうした理念に基づく冊封関係を軸に、漢代以降の東アジアにおいては独自の国際秩序が形成されていた。このように、中国を中心とする国際秩序が典型的に完成したのは、唐帝国の出現によってである。618年に唐王朝が成立すると、その翌619年には高句麗が入朝し、621年には高句麗・百済・新羅が朝貢し、やがてそれらの国々との間に冊封関係が成立した。ついで高句麗・百済の滅亡があり、朝鮮半島における新羅の勢力の拡大にともなって唐と新羅との宗属関係に変遷があった<sup>2</sup>。そうして新羅による朝鮮半島の統一となり、さらにその北方には滅亡の高句麗の継承を唱える渤海が建国され、新たに唐と冊封関係を結ぶなど、唐をめぐる国際情勢が目まぐるしく変転したことは歴史の証明するところである。

白村江の戦い<sup>3</sup>で敗北した倭においては、壬申の乱を経た天武・持統朝期に律令制が構築され、大宝律令制定の翌702年、久々に派遣された遣唐使ははじめて自らを「日本」の信者と名乗る。しかしながら、日本は朝貢国として唐に使節を送った。これが遣唐使と呼ばれるものである。唐は隋のあとをうけた大帝国であり、インド・ペルシア・アラビアにわたる世界的文化圏の中心であった。そこには、日本にとって摂取しなければならない数々の文化があったことは明白である。日本が対等となろうと意図し、中国がこれを蛮夷視したとしても、朝貢と頒贈の関係には支障はあるべくもなかった。この時期が「倭」の国号から日本国号に転換した飛鳥朝であった。このように、唐を中心とし、渤海・新羅・日本が周辺に配置されるかたちで、古代の東アジア世界が完成の域に達したのである。日唐関係の組織や方式は、中国を中心とした国際秩序の見方からすれば、中国と他国の場合に比し、多少の相違があったであろう。というのは、朝鮮半島の場合は地

理学的・政治学的な側面で中国と緊密な関係を保ちながら、影響力が特に強かった反面、海を渡った日本についてはそれほど影響力が強くなかったと思われるからである。しかし、東アジアの国際的秩序を考えれば、完全に例外的なものであったといいきることはできないだろう。そして、日唐関係の形態が、日本にとっては、室町時代足利義満が明との間に冊封の関係を結ぶまでは基本的形態となったのである。

結局、冊封体制の外側に置かれながらも、中国の文物制度の摂取受容についてはきわめて積極的な姿勢を示してこれと対等の関係を保持しようとし、一方朝鮮半島に対してはこれを朝貢国視してつねに一段上位の立場を確保しておきたいというのが推古朝以来一貫した国際社会における日本の姿勢であったということができよう。

東アジア世界の展開のなかで創出されたのが、「日本」における「天皇」の称号である。それは、中国の東方にいま一人の皇帝として屹立しようというもので、中華帝国のミニチュア版、東夷の小帝国をつくろうとする志向を体現した称号であった。朝貢国をもたない皇帝はありえず、天皇すなわち皇帝たるためには朝貢国が存在しなければならない。周辺に朝貢国を想定するとすれば、具体的には朝鮮半島にもとめることになる。天皇とは、その本質において朝貢国を従えてはじめて成り立つ称号なのであり、天皇が天皇たるためには、朝鮮の服従が不可欠の前提だったのである。まさしく、令の規定は唐を「隣国」とするのに対し、新羅を「藩国」と位置づけた。おくれて国交がはじまる渤海も同様の扱いとなる<sup>4</sup>。

7世紀、東アジア世界の展開のなかで中国と朝鮮は「朝貢関係」で、中国の皇帝と朝鮮の国王は上下関係、すなわち冊封関係が維持されていた反面、日本は中国の皇帝と同じものであると考えて、「天皇」という称号を創出した。日本の外交に関する制度や慣習は、古来中国の冊封関係を模したものであったといえる。聖徳太子の外交は中国に対しては大体隣国として対等の立場を維持して交渉しようというのが基本的な姿勢であったと考えられる。したがって、新羅が朝鮮半島の統一に成功して対等の立場で日本との外交関係を持とうとした際、日本ではこれに感情を害して新羅を敵視する態度に変わり、排他的・閉鎖的態度をとるようになった。このような対外観念は、新羅滅亡後朝鮮半島の主となった高麗王朝に対しても同様であった<sup>5</sup>ことは容易に推察できる。先述したように、この過程で天皇すなわち皇帝たるためには朝貢国が必要であった。周辺に朝貢国を求めるとなれば、具体的には朝鮮半島しかなかっただろう。それゆえこそ「天皇とは、その本質において朝貢国を従えてはじめて成り立つ称号なのであり、天皇が天皇たるためには、朝鮮の服属が不可欠の前提だった」ことであろう。まさしく、令の規定は唐を「隣国」とするのに対し、新羅を「藩国」と位置づけ、朝鮮（新羅）との冊封関係を結ぼうとした。が、当時朝鮮半島が遂に新羅によって統一され、倭の王権の活動範囲が最終的に日本列島内に限定されることが確定した時期でもあって、現実にはあり得ない虚構性を帯びざるを得なかったのではないか。そのため、朝鮮諸国が天皇に服従していたことを強調する歴史の創作が行われたのではなからう

か。神功皇后の新羅征伐と三朝朝貢、仁那日本府の記述などは、天皇支配正当化のための歴史書である『日本書紀』にとって、その根幹にかかわる重大な意義をもつものであったろう。また、高橋公明の「外交儀礼よりみた室町幕府の日朝関係」では、神国思想が日朝の外交関係で大きな阻止要因になっていると主張している<sup>6</sup>（『史学雑誌』91編、8号、1982年8月、p.16）。こういう状況の中、日本は中国と朝鮮との正式の国交をもたない状態になる。しかし、朝鮮を藩国とする理念のみは、その存在と密接に結びついて保存されつづけたのである。このような「虚構性」として朝鮮を格下げてみてきたまなごしは明治になると同時に、政治家やオピニオン・リーダーたちを中心に刷り込まれてしまい「文明化」の名の下に朝鮮を植民地化する正当性に本格的に利用されることになる。

## 2. 江戸時代における日朝関係

### 1) 日朝関係の再開

徳川家康によって、1604年に江戸幕府は開かれた。この時代は歴史教科書では「鎖国」時代と呼ばれている。この徳川鎖国時代を通じて日本は四つの国際交流を持っていた。すなわち、朝鮮・琉球・オランダ・中国である。オランダと中国は通商の相手（貿易関係の国）であった。また、朝鮮と琉球は通信の相手（外交関係の国）であった。それらの中で日本が唯一の正式な国交を結んでいたのは李氏朝鮮である<sup>7</sup>。というのも、秀吉の侵略によって断絶した明および朝鮮との国交回復が、新たな幕府を創設した徳川家康にとって緊急の外交課題となったからである。日朝関係では双方の面子のぶつかりあいとなったが、対馬藩が中間に介在して1606年に先ず「日本国王」使を送り、これに応じるかたちで翌07年には朝鮮国王が回答使を派遣、江戸城において2代将軍秀忠と会見して国書の交換を行ない、国交の回復が実現する<sup>8</sup>。この時代、日朝関係は室町幕府以来、あらかじめ「対等関係」「交隣関係」として歴史のなかで位置づけられている。1980年代以降、李進熙、姜存彦、李元植、辛基秀らの在日韓国・朝鮮人研究者の活発な研究は、苦しい日朝関係に一つの突破口を開ききっかけとなった。しかし、なにか釈然としない、気持ちが悪くするのはなぜであろうか。それは、徳川家康政権と朝鮮との外交では国王称号や捕虜人刷還問題等が解決せず、その問題を棚上げにして国交回復を急ぐあまり、その背後には何らかの問題が存在したに他ならないのではないか。そこで、「交隣関係」の言葉どおりに、日朝関係というものが本当に順調であったのか、本稿で問い直したい。

孫承喆は、この「交隣」という言葉に違和感があると主張する（孫承喆著、山里澄江・梅村雅英訳、『近世の朝鮮と日本』、明石書店、1988、p.4）<sup>9</sup>が、果たして大きく異なる「交隣」関係というものは何を意味しているのだろうか。結論から言えば、孫承喆は江戸時代の「交隣関係」を表面的な「交隣関係」として位置づけている。すなわち、室町幕府は朝鮮との関係を実利的な利益のためにのみ、友好関係を結んだわけで、江戸時代には名分論的日朝関係が成り立ったわけである。だとすれば、徳川幕府が再度、朝鮮との国交回復にこれほど力を入れた理由とは何である

うか。また、対馬を仲介に両国の国交を再開したが、朝鮮王朝と幕府との直接的な関係はなかったといえる。それは朝鮮に大きな不信感も与えることであった。例えば、柳川一件である。朝鮮側からはまず朝鮮征伐の際の罪人を差し出すように要求されたため、対馬藩は藩内の罪人の喉を水銀でつぶした上で差し出した（朝鮮征伐とはまったく無関係の罪人である）。これらの対馬藩の形振り構わぬ努力の成果か、朝鮮では満州の女真族(後金)の勢力拡大で北方防備の必要もあって交渉には宥和的で、1605年、朝鮮は徳川政権から先に国書を通じることを要求した。対馬藩は国書の偽造を行い朝鮮へ提出する。書式などから偽書の疑いが生じたものの、朝鮮は回答使を派遣し、さらに対馬は幕府には通信使と偽り、使節は江戸城において2代将軍徳川秀忠と、駿府で大御所の家康と謁見する。対馬藩は回答使の返書も改竄し、1617年、1624年と三次に渡る交渉でもそれぞれに国書の偽造、改竄を行い、1609年には貿易協定である己酉条約を締結させる<sup>10</sup>。このように、釈然としないことがあったにもかかわらず、朝鮮は日本と外交を結び、200年を通して、正式に12回にわたり、日本に朝鮮通信使という使節団を派遣することになったのである。

## 2) 幕府為政者からみた朝鮮観の二面性

### ① 壬辰倭乱と軍事的弱国朝鮮

戦国の世を統一した織田信長の遺業を受け継いだ豊臣秀吉は、天下を取ると、早速東アジアの統一を夢見たといわれる。彼は、早くから朝鮮及び中国はもちろん、遠く南洋方面まで支配しようという大志を抱き、九州征伐が終わると、使者を朝鮮に遣わして、日本への入朝を促し、さらに小田原平定ののち、朝鮮王に命じて「征明」への誘導をさせようとした。ところが、朝鮮は太祖李成桂と明との事大関係になるためにその要求には応じなかった。

そこで、秀吉は、まず朝鮮を討ったのちに明に進もうとし、関白職を秀次に譲り、ついに大陸遠征の大軍を發したのである。文禄元年(1592)3月に指定された渡鮮軍の部署は、すべて九軍であった<sup>11</sup>。秀吉の朝鮮侵略は、はじめ15万、のち14万もの大軍が前後7年にわたって朝鮮を侵略し、この侵略戦争で強制的に日本に連行された朝鮮人は5～6万人にも達したと推定されている<sup>12</sup>。この朝鮮人の大部分は非戦闘員であり、のちに朝鮮に帰国したものは、記録で見える限りでは7,500人にすぎない。他の数万人に及ぶ朝鮮人の大部分は奴僕として労働に従事させられ、死ぬ者も少なくなかったが、帰国の手段もなく、半ば帰化した者も少なくないといわれる<sup>13</sup>。このような大規模な侵略戦争は、結果的には、日本の軍事的敗北で終わったが、戦争初期の戦いにおける朝鮮王朝軍のあっけないまでの敗走は、日本側に朝鮮は軍事的弱国として強く印象づける結果となったのである。加えて、有名な碧蹄館<sup>14</sup>の戦いに代表されるように、陸上戦闘における主力決戦が、朝鮮王朝軍との間ではなく、朝鮮王朝救援に駆けつけた明国軍との間で行われたこと、また、この戦争の終戦処理交渉の過程においても朝鮮王朝の代表が排除され、それが豊臣政権と明との間の直接交渉によって行われたことは、日本側に「自分達は朝鮮ではなく大國明に敗れたのだ」とする論理を可能にし、結果として、日本は遂に朝鮮に敗れなかったのだという認識を武士層に抱かせ、更にはそれが日本書紀的な「朝鮮は本来日本の属国である」という歴史的認識

を強化することになったことは言うまでもない<sup>15</sup>。この侵略戦争が当時の日本人の対朝鮮認識に与えた影響は一部の武士に過ぎなかったが、その後、日本人の朝鮮観形成に大きな影響を及ぼすことになったのは明白であろう。

## ②儒教の国・朝鮮

朱子学が日本に伝わったのは鎌倉時代であるが、日本に朱子学が定着するようになったのは徳川時代であるといわれる。徳川幕府は封建教学として朱子学を取り入れるが、朝鮮朱子学の強い影響を受けて、はじめて確立することができたことは注目に値する。

日本に朱子学を導入し、確立した藤原惺窩（1516-1619）や林羅山（1583-1657）は、秀吉の朝鮮侵略の際に日本が朝鮮から略奪した多くの朝鮮図書、特に朝鮮朱子学を大成した李退溪<sup>イテグ</sup>の著書をはじめとする朱子学の本を読んでいた。とりわけ、日本朱子学の創始者である藤原惺窩は、朝鮮の朱子学者李退溪（1501-1570）の門下生である姜沆（1567-1618）の教えを受けながら日本朱子学を確立した。姜沆は、秀吉の朝鮮侵略の際に捕虜となって日本に連行された儒者である。惺窩は姜沆と知り合うことによってはじめて、朱子学を体系的に学ぶことができた。そうして彼の学問を会得していったのである。また山崎闇斎（1618-1682）も李退溪の著書、なかでも『自省録』に強い影響を受けたといわれる<sup>16</sup>。このように、日本朱子学は、朝鮮朱子学なくしてはその成立と展開が考えられないほど、朝鮮から強い影響を受けていたのである。したがって、藤原惺窩、林羅山、山崎闇斎などの日本朱子学学者は、朝鮮の朱子学者、特に李退溪を非常に尊敬していた。惺窩は朝鮮風の「深衣道服」を着用し、「篤く唐制及び朝鮮の礼を好み、衣服飲食の末に至るまで必ず唐と朝鮮とに倣はんと欲し、日本に居ると誰も日本人に非ざるなり」といわれるほど中国、朝鮮を尊敬し心服していたといわれる<sup>17</sup>。

しかし、朝鮮人学者に対する尊敬は何も李退溪だけに限られていたわけではない。例えば、鄭月峯、洪浩然、李真栄、李梅溪、高木紫溟など、決して少なくない。鄭月峯は秀吉の朝鮮侵略で捕虜となった朝鮮人学者であるが、彼は徳島で優遇されている<sup>18</sup>。洪浩然是12歳のとき秀吉の朝鮮侵略で捕虜となり、佐賀に送られたが、文才のあるところから儒学を学ばせられた後に君側に仕えた。そして彼の子孫は古賀精里<sup>19</sup>の妹を妻にしている<sup>20</sup>。李真栄は、23歳のとき秀吉の朝鮮侵略で捕虜となって日本に連行されたが、のち和歌山で儒学を講じ、旧家の日本人と結婚、紀州藩主の侍講になった。李梅溪は李真栄の子であるが、彼は紀州の儒員として名を広めて、藩主の娘と結婚している<sup>21</sup>。高木紫溟は熊本時習館の三代の教授として勤めたが、彼の家系は秀吉の朝鮮侵略で捕虜となった朝鮮人に発し、高木の姓は高麗の「高」と日本の「本」からといわれている。彼自身は朝鮮人の血のつながりはないが、多くの場合、李順と朝鮮名で署名し、李先生と尊称されていたといわれる<sup>22</sup>。こうした例を見てもわかるように、彼らは朝鮮人として差別されたり、蔑視されたりすることなく、むしろ朝鮮人学者として尊敬されていたのである。

朝鮮人学者に対する尊敬は、来日した朝鮮の通信使に対する日本の儒者たちの態度にもよく現われている。朝鮮通信使の一行には必ず朝鮮人学者が含まれていたため、各藩は通信使来日のた

びに競って儒者を通信使のもとに派遣し、勉強させようとした。そして、朝鮮人学者と詩を唱和し、あるいは朝鮮人学者に書をもらうことをこの上ない名誉とする風潮が一般に存在し、地方の儒者たちの朝鮮人学者に対する態度は、尊敬よりも崇拜に近いものさえ少なくなかったといわれる<sup>23</sup>。中井竹山はこうした状況を「草茅危言」で次のように記している。

韓使ハ文事ヲ主張スル故、随分才ニ秀デタルヲ撰ミ差越スト見ヘタリ、故ニ沿道各地館ニテ候国ノ儒臣ト詩文贈答筆談ノ事多シ、…又三都ニテハ平人迄モ手寄サヘアレバ、館中ニ入テ贈答スルニ官禁モナケレバ、浮華ノ徒先ヲ争テ出ル事ニナリ、館中雜沓シテ市ノ如ク、辣文惡詩ヲ以テ韓客ニ冒触シ、其甚敷ハ一向未熟ノ輩、百日モ前ヨリ七律一首様ノ詩荷ヒ出シ、夫ヲ懐中シ膝行頓首シテ出シ、一篇ノ和韻ヲ得テ終身ノ榮トシテ人ニ誇ル<sup>24</sup>

このように、朝鮮は儒教の国として、とりわけ封建的秩序の形成に役立つ朱子学の学習という側面から尊敬されていた。しかし、一部儒学者に限られた朝鮮尊敬の風潮は日本に様々な朱子学派の発生するのにもなって次第に薄れ、17世紀後半頃には熊沢蕃山、山鹿素行などによって、朝鮮尊敬の風潮とはまったく異なる朝鮮蔑視が打ち出される。以後、朝鮮蔑視観は18世紀の本居宣長に代表される国学の台頭とともに次第に強化され、さらに19世紀の西洋近代のナショナリズムと結びついて、幕末の「征韓論」にたどり着くのである。結局、他者との出会いとは、他者によって揺り動かされその学問を受け入れることはできたにもかかわらず、自己を壊すところまで至ることはできなかった。他者をモノ化しそこから他者を支配しようとする心性は当時も同様であった。

### 3. 新井白石と雨森芳洲—日朝関係の展望

18世紀初めの政治的環境における新井白石（1657～1725）や雨森芳洲（1668～1755）は、朝鮮通信使との関わりで朝鮮との外交問題を正反対の立場で論じていた。幕府での白石の政治的発言は力を持っていて、朝鮮の外交問題における中心人物であることは確かであることから、知識人たちの「主流派」の考え方を通して朝鮮を観ることができる。その一方で、芳洲は幕府から離れた対馬の地で主に朝鮮との外交を担当し、朝鮮との「友好関係」を考えて「主流派」とは違う考えの持ち主ではなかったろうか。だとすれば、二人の立場から、朝鮮の外交問題に対する考え方には確かに「ずれ」が生じていたといえるであろう。それを明らかにすることによって、江戸時代の朝鮮観（＝主に知識人たち）について考えてみたい。

さて、宮崎道生は、白石の朝鮮外交の基本方針は「和平・簡素・対等の三者」によって構成されていると述べている<sup>25</sup>。その一方で、仲尾宏は、「白石は、国家意識としての対等性の追求と同時に、文化意識として朝鮮よりも日本が優越しうる、あるいは現に優越しているというコンプレックスを持って聘札改革に臨んだのであった」<sup>26</sup>と述べた。このように、白石の朝鮮観には、確か



に二律背反的な観点が窺える。たとえば、彼の朝鮮通信使に対する見解には、当時の幕府が置かれている財政的危機感とあやふやにされている国号問題が大きな問題点として取り上げられよう。彼は、17世紀後半から18世紀前半にかけて幕府が直面した社会的、経済的な問題を朝鮮通信使との接待の改革と深く係わりがあると主張し、国家的な見地から経済問題を構想しようとした。それは通貨の改鑄及び安定や、長崎貿易の規制に彼の焦点が合わせられていたことから明らかである。しかし、最も顕著にそれを示すのは、白石が伝統的に幕府の利権の領域と見なされてきたものの、限界を超えて海外貿易の規制を拡大しようとしたことである。すなわち、幕府の権力の拡大を望み、中央集権の政治権力を作ろうとしたのである。幕府は当初長崎を窓口とする対外貿易への支配権を確立したが、長崎以外の二つの貿易経路に関しては、1630年代の鎖国確立後でさえも、直接係ることはなかった。すなわち、薩摩の琉球貿易と対馬の朝鮮貿易がそれである。特に、対馬を通した朝鮮貿易は日本に大きな財政危機を与えたといわれる。白石は朝鮮貿易のために特別な銀を鑄造することに反対した。なぜならば、その銀の鑄造は幕府に大きな負担をかけたからである。その中でも彼は將軍を日本国王に着せ替えることを図り、その目標を達成するために伝統的な朝鮮関係や外交儀礼を変えようとしたのである。

また、白石は政治的現状への挑戦を正当化するために、『古事記』『日本書紀』『神代』の叙述を始め、日本歴史の展開を換えることを試みた。特に、朝鮮通信使を通して將軍を名実ともに王として出現させたばかりか、大名を支配する彼の権威をより明確に確立し、朝鮮との「対等な交流」よりさらに「朝貢関係」としてのイメージを確実なものにしたことが窺える。そこで、朝鮮通信使との儀礼に関して多くの変更を提案した。なかでも、中心的なのは「大君」という称号を廃止すべきだという進言であった。かわりに將軍は「日本国王」と呼ばれ、また署名もすべきだというものである。白石には「大軍」という称号に反対する二つの理由がある。一つは、「大軍」が天皇を連想させるため、それを將軍に用いれば大逆の気味を与えるということであり、二つは、朝鮮国内で「大軍」は、世嗣以外の王子の称号に用いられるということである。それゆえ「大軍」という称号を持つことで、將軍は、朝鮮人の目には朝鮮国王に従属したものと映るのである。白石が儒教から引き出した原理のなかで、「天下は唯一者の支配の下に統一されるべきであり」ということは、今まで將軍の政治的影響を及ぼすことのできなかつた領域までそれを拡大させるばかりでなく、海外との関係における將軍の地位の向上まで望んだということではないだろうか。しかしながら、白石が天皇の存在自体を否定したとまでは言えず、あいまいなところがあることは認めざるを得ない。しかし、この問題と関連するものとして、朝鮮に対する白石のイメージは次の文章から読み取れる。

夫れ朝鮮は狡黠にして詐多し、利の在る所、信義を顧みず。蓋し歳貉の俗たる、天性固より然り（中略）朝鮮の史書を見ると、日本をあたかも朝鮮の属国のように記しているが、その逆で朝鮮こそ日本に臣属していたのだ<sup>27</sup>。

古の時には、三韓の国々本朝の西藩にて、其国々の君皆これ本朝に臣属して、其国に王たりき<sup>28</sup>

以上、白石にしてさえ、歴史書に描かれた「蕃国」「属国」という位置づけから放たれてはいなかったのである。これはむしろ、17世紀の学問のなかで熊沢蕃山(1619~91)<sup>29</sup>と山鹿素行(1622~85)<sup>30</sup>を中心に、朝鮮蕃国観が知識人たちに広がっていたと見るべきであろう。特に、山鹿素行は、中国に代わって日本を中心とした世界秩序を編成してゆこうとする、いわゆる「日本型華夷秩序」<sup>31</sup>と呼ばれる考え方の持ち主であった。こうして、天皇の存在と密接に結びついた朝鮮蕃国観は、現実の交渉を通じて修正を迫られることもないまま、観念の世界で保存され続けたといえるだろう。

その反面、こうした流れの中で筆者が雨森芳洲に関心を払うきっかけとなったのは、偶然に出会った一冊の資料である。それは、神田喜一郎が1949年に著した「朝鮮と雨森芳洲」<sup>32</sup>である。1949年は日本が戦争に負けて4年後であるが、当時の韓国との外交関係をめぐっては考慮の余裕もなかったのではないだろうか。否むしろ、日本国家の再建というものが最優先であったと思われる。しかし、その険しい社会的環境の中であって、神田は、「われわれ日本人にとって、何からいつても最も近い間柄の国である。その國の人達とは、單に意志の疎通するといふ以上に、互いに親密に胸襟を開いて語りあはねばならない。」<sup>33</sup>と主張し、朝鮮(=韓国)との関係を新しく構築することで、それを外交上に応用した「雨森芳洲」に着目した。最近に入っては、上垣外憲一が力を入れて雨森芳洲を研究しているが、彼はそのなかでも「国際人として忘れられた思想家になっていく芳洲」を取り上げ、朝鮮との平等関係を力説している。この本が出版されたのはちょうど、ベルリンの壁が崩壊した年と重なる。これをきっかけに、「民主主義-共産主義」のイデオロギーが市場経済主義という原理により世界が変わろうとしている時期でもあった。次の年に入ってから、日本はバブルが弾かれ経済的に絶望の淵へ陥れ、戦後日本が恩恵を享受してきた「富」を改めて考えなければならない課題が突きつけられた。このような世界の変化とともに、激動する東アジアの秩序の変化に敏感に反応して出された一冊ではないかと筆者は思っている。

ここで、雨森芳洲の生い立ちを簡単に述べると、芳洲の家は徳川の支配の中、武士であることを捨てて医者への道を歩んでいくことになる。しかし、18才に木下順庵の門下に入り、儒学者になった。彼は順庵の推挙により、対馬に外交官として任命され、朝鮮通信使との深い係わりを持つことになる。そこで、対馬を通した朝鮮通信使とのやり方で新井白石と対立した。彼の書いた『交隣提醒』(1728)のなかで、次のように朝鮮に対して言及している。

朝鮮国を礼儀の国と申、又は弱国なりと日本人の申習し候に心得違ひ有之候歟と被存候。天地の間何レの国にても礼なく義なく候而ハ、国内治平成へき様無之候得ハ、朝鮮に限、礼儀万国に勝れ可申様も無之候。<sup>34</sup>

朝鮮は礼儀正しい国であると褒めているのである。そして、自国の基準に合わせて他国を評価するよりは、異文化の差異を認め、そこから国との関係を維持すべきであることを芳洲はいつも念頭に置きながら、朝鮮との外交関係を考えていたようである。また、朝鮮通信使をめぐる政策において、経済的簡素化には同感であったものの、しかし、彼は白石の「国王への復号」に激しく反発したのである。それは彼の生い立ちとも関連しているのではないだろうか。宝永六年（1709）、芳洲42歳のときに書かれた手紙には、祖父、祖母、伯父、叔父、両親の墓が京都の報恩寺にあると記されている。また『近世畸人伝』（1790）には、「芳洲は京師の人」と書かれ、京都出身としていたことから、雨森家の墓所も京都に置かれるようになったのであろう。このことも、彼の思想、政治観に大きく影響したと思われる。なぜならば、京都は幕府の支配体制の確立した17世紀後半にあっても、天皇のお膝元としての意識が強く、反幕感情が根強かったからである。さらに、京都の尊王思想にも強かったと言われる。また、上垣外によれば、「芳洲の尊王論が、国義粹主的な天皇中心論とは大いに性格を異にしていることがわかる。また天皇の血統の神聖のみを強調する単なる名分論でもないことがわかる」<sup>35</sup>ということから、江戸時代の国粹主義者との差異を強調したともいえるであろう。ただここでは、それが、芳洲において晩年まで幕府に進出できなかった大きな原因のひとつではないかという問題提起に留めておく。

## むすび

秀吉の侵略によって断絶した明および朝鮮との国交回復が、新たな幕府を創設した徳川家康にとって緊急の外交課題となった。日朝関係では双方の面子のぶつかりあいとなったが、対馬藩が中間に介在して1606年に先ず「日本国王」使を送り、これに応じるかたちで翌07年には朝鮮国王が回答使を派遣し、江戸城において2代将軍秀忠と会見して国書の交換を行ない、国交の回復が実現する。

そこで、江戸時代を通して12回来日した朝鮮通信使は、しばしば日朝間の「和平」「善隣友好」の証として、その文化交流の歴史的意義が高らかに論じられてきた。一方、徳川家康政権と朝鮮との外交では国王称号や捕虜人刷還問題等が解決せず、その問題を棚上げにしたまま国交回復を急いだ。このような二面性を孕みながらも、朝鮮通信使を媒介として日朝間の交流は主に詩文の応酬・医事薬草に関する情報交流等々、友好と交流が深まりつつあったが、新井白石の登場により、朝鮮通信使との関係は新たな局面に至った。白石は17世紀後半から18世紀前半にかけて幕府が直面した社会的、経済的な問題を朝鮮通信使との接待の改革と深く係わりがあると主張し、国家的な見地から経済問題を構想しようとした。そして、白石は政治的現状への挑戦を正当化するために、『古事記』『日本書紀』『神代』の叙述を始めたが、そこから朝鮮に対する白石のイメージは「蕃国」「属国」という位置づけから変化することはなかった。結局、白石においては他者（＝朝鮮）とのかかわりのなかで、まず自己を改革するという行為は含まれず、自国中心的な発想から出発しており、その発想からは朝鮮と対等な関係を結ぶことは想像しがたい。東アジア世界に

属し文明を享受しながら自主性を保とうとする日本のなかで、朝鮮属国観もその一つであった。島国であったという地理的環境の影響もあり、中国を相対化するところまで練り上げてそれを乗り越えるためには西洋の発見までに待たなければならなかった。白石が世界事情などを披瀝して朝鮮通信使に優越的立場に立とうとする動機とは、西洋文明が脅威でもあるが誘惑であった事情もあり、それはまさに大国主義への序曲といえるだろう。

一方、雨森芳洲は朝鮮を礼儀正しい国であると褒めており、自国の基準に合わせて他国を評価するよりは、異文化の差異を認め、そこから国との関係を維持すべきであることをいつも念頭に置きながら、朝鮮との外交関係を考えていたことが窺える。しかし、残念ながら、芳洲は江戸幕府の政治権力の周辺に位置づけられ、その発言力は幕府の朝鮮政策において大きな影響力を発揮することはできなかった。しかも、上垣外憲一が名づけた「国際人」とは、腑に落ちないところもある。単純に両国間の関係で「国際人」という意味は耐えられるのだろうか。にもかかわらず、東アジアの国際情勢が変わろうとしている時期に「雨森芳洲」を手がかりに、日韓関係を改めて検討しようとすることに意義があると筆者は思っている。さらに、雨森芳洲には自己変革を図りそこから他者を受け入れようとする面が窺われた。

近来、流行のことは「他者理解」「異文化理解」等国際化を掲げて、他者をどのように理解するかはとても重要なポイントになるだろう。そこでは、「自己—他者」は同等の関係ではなく、自分がどこかで特権性を持っていることに気づくことがとても大事である。しかし、日本が近代になってから近隣国家をはじめ、アジアを植民地化していく歴史からみると、他者理解を「優勝劣敗の原則を基礎とした民族主義」<sup>36</sup>すなわち、力で他者を支配する植民地化の意識が強かったことはもう一度考えるべきではないかと思われる。

## 注

<sup>1</sup> 日本語の意味ではお婆さんという。

<sup>2</sup> 田中健夫『中世対外関係史』東京大学出版会、1975年、6頁

<sup>3</sup> 天智天皇2年（663）白村江での、日本・百済連合軍と唐・新羅連合軍との戦い。日本は唐・新羅に攻略された百済の救援のために軍を進めたが、大失敗し、百済は滅亡。日本は朝鮮半島進出を断念。

<sup>4</sup> 吉野誠『明治維新と征韓論』明石書店、2002年、14頁

<sup>5</sup> 田中健夫、前掲書、74頁

<sup>6</sup> 律令国家成立後の日本は、朝鮮半島の王朝に対しては優位な立場、中国の王朝に対しては対等あるいはそれに近い立場をとることが基本的な外交姿勢であった。そして歴史のかつ具体的にはこの伝統的外交観を満足させる形式で外交関係が成立したことはなく、かえってこれが外交関係を成立させる上で重大な阻止要因となったことは周知のことである。

<sup>7</sup> 金両基「徳川家康の平和外交と朝鮮通信使の復活」『常葉学園大学研究紀要—教育学部』第25巻、常葉学園大学編、2004年、6頁

- <sup>8</sup> 仲尾宏『朝鮮通信使と徳川幕府』明石書店、1997年、12-13頁
- <sup>9</sup> 日朝関係を「交隣」という用語をもって一般的に理解しようとする場合、かなりの難しさがある。何故なら、「交隣」とは隣国と友好的に、平和に過ごすという意味を持っているにもかかわらず、日朝関係の歴史的な推移を振り返ってみる時、そこには本来の意味とは大きく異なる「交隣」関係が見られるからである。
- <sup>10</sup> 紙谷敦之『大君が外交と東アジア』吉川弘文館、1998年、17-22頁
- <sup>11</sup> 石原道博『文禄・慶長の役』塙書房、1963年、12-16頁
- <sup>12</sup> 内藤雋輔「壬辰・丁酉役における被慮朝鮮人の刷還問題について」下『朝鮮学報』第34輯、1965. 5、133-135頁
- <sup>13</sup> 内藤雋輔「壬辰・丁酉役における被慮朝鮮人の刷還問題について」上『朝鮮学報』、第29輯、1963. 11、80頁
- <sup>14</sup> ソウルの近郊にある。碧蹄館の戦いにおいて三城は、戦いに免れる諸将を抑え、漢城近郊まで敵軍を引き寄せてから、自軍を結集して反撃することで戦いを勝利に導いた。
- <sup>15</sup> 木村幹「＜不潔＞と＜恐れ＞—文学者に見る日本人の韓国イメージ」岡本幸治著『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房、1998、106-107頁
- <sup>16</sup> 阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』東京出版会、1965年、78-79頁
- <sup>17</sup> 同上、81頁
- <sup>18</sup> 内藤雋輔、前掲書、1963. 11、92頁
- <sup>19</sup> こがせいり（1750-1817）、いわゆる「寛政の三博士」の一人として講壇にたち、思想・学問の統制に力を注いだ江戸時代後期の儒学者。通称弥助、佐賀鍋島家臣の家に生まれた。横井小楠に陽明学を、ややのち西依成斎を修む。主著に『四書集釈』『近思録集説』、時局論の『極論時事封事』などがある。
- <sup>20</sup> 松田甲「朝鮮より出でたる佐賀の儒者洪浩然」『日鮮史話』、第1巻、朝鮮総督府、1976b、77-105頁
- <sup>21</sup> 松田甲「紀州徳川家の大儒李梅溪」『日鮮史話』、第2巻、朝鮮総督府、1976c、1-29頁
- <sup>22</sup> 松田甲「朝鮮人を祖先とせる熊本の碩学高木紫溟」前掲書、朝鮮総督府、1976a、105-121頁
- <sup>23</sup> 松田甲「毛利氏の朝鮮聘使接待」『日鮮史話』、第3巻、朝鮮総督府、「会津松平家と朝鮮」「水足博泉と申維翰」『日鮮史話』第3巻、1976d、87-107頁
- <sup>24</sup> 滝本誠一『日本経済叢書 第16巻』日本経済叢書刊行会、1914-1917、368頁
- <sup>25</sup> 宮崎道生『新井白石の研究—増訂版』吉川弘文館、1969年、49頁
- <sup>26</sup> 辛基秀・仲尾宏『大系朝鮮通信使—善隣と友好の記録 第四巻』明石書店、1993年、69-70頁
- <sup>27</sup> 国書刊行会編『新井白石全集 第3巻』国書刊行会、1977、702-704頁
- <sup>28</sup> 同上、635頁
- <sup>29</sup> くまざわばんざん、江戸前期の儒学者。山城の人。名は伯継。字（あざな）は了介（りょうかい）。別号、息游軒。中江藤樹に陽明学を学び、岡山藩主池田光政に仕えた。晩年、政治批判で幕府に疎まれ、幽囚中に病死。著「大学惑問」「集義和書」「集義外書」「源氏外伝」など。
- <sup>30</sup> やまがそこう、江戸前期の儒学者・兵学者。会津の人。江戸に出て儒学・兵学・神道・仏教・歌学な

どを修め、古学を提唱した。官学の朱子学を批判して「聖教要録」を著し、播磨の赤穂に流されたが、許されて江戸に帰った。著「配所残筆」「中朝事実」「武教全書」など。

- <sup>31</sup> 「況や勇武の道を以ていはば、三韓をたひらげて、本朝へみつぎ物をはじめ、高麗をせめて其の王城をおとし入れ、日本の府を異朝にまうけて、武威を四海にかがやかす事、上代より近代迄しかり」（山鹿素行、1940b、592-593頁）、「高麗は本我が属国なり、文と云ひ武と云ひ、又外朝に比すべからず。況や中華に比すべからず。」（山鹿素行、1940a、216頁）
- <sup>32</sup> 神田喜一郎「朝鮮と雨森芳洲」『世界人』世界人社 通号7、1949. 4、48-52頁
- <sup>33</sup> 同上、48-49頁
- <sup>34</sup> 雨森芳洲『芳洲外交関係資料・書翰集』関西大学出版部、1982年、12-13頁
- <sup>35</sup> 上垣外憲一『雨森芳洲－元禄享保の国際人』中公新書、1989年、22頁
- <sup>36</sup> 곽준혁 『춘원 이광수와 민족주의』 정치사상연구제11집1호、2005. 5、100頁（郭峻赫「春園・李光洗と民族主義」政治思想研究第11集1号、2005. 5. 100頁）

## <参考文献>

### I. 書籍

- 阿部吉雄1965『日本朱子学と朝鮮』東京出版会
- 雨森芳洲1982『芳洲外交関係資料・書翰集』関西大学出版部
- 石原道博1963『文禄・慶長の役』塙書房
- 上垣外憲一1989『雨森芳洲－元禄享保の国際人』中公新書
- 紙屋敦之1998『大君が外交と東アジア』吉川弘文館
- 木村幹1998「<不潔>と<恐れ>—文学者に見る日本人の韓国イメージ」岡本幸治著『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房
- 辛基秀/仲尾宏1993『大系朝鮮通信使—善隣と友好の記録 第四巻』明石書店
- 滝本誠一1914-1917『日本経済叢書 第16巻』日本経済叢書刊行会
- 田中健夫1975『中世対外関係史』東京大学出版会
- 仲尾宏1997『朝鮮通信使と徳川幕府』明石書店
- 松田甲1976a「朝鮮人を祖先とせる熊本の碩学高木紫溟」（『日鮮史話』、第1巻、朝鮮総督府）
- 1976b「朝鮮より出でたる佐賀の儒者洪浩然」（『日鮮史話』、第1巻、朝鮮総督府）
- 1976c「紀州徳川家の大儒李梅溪」（『日鮮史話』、第2巻、朝鮮総督府）
- 1976d「毛利氏の朝鮮聘使接待」（『日鮮史話』、第3巻、朝鮮総督府）、「会津松平家と朝鮮」「水足博泉と申維翰」（『日鮮史話』第3巻）
- 宮崎道生1969a『新井白石の研究—増訂版』吉川弘文館
- 1969b『新井白石の現代的考察』吉川弘文館
- 山鹿素行、廣瀬豊編1940a『山鹿素行全集 第12巻』岩波書店

—————1940b『山鹿素行全集 第13巻』岩波書店

吉野誠2002『明治維新と征韓論』明石書店

## II. 論文

金両基2004「徳川家康の平和外交と朝鮮通信使の復活」(常葉学園大学編『常葉学園大学研究紀要—教育学部』第25巻)

곽준혁『춘원 이광수와 민족주의』정치사상연구 제11집1호、2005. 5 (郭峻赫「春園・李光洗と民族主義」政治思想研究第11集1号、政治思想研究、2005. 5)

## III. 雑誌

井上厚史2005. 10「新井白石の朝鮮観」『環』(通号23) 藤原書店

内藤雋輔1963. 11a「壬辰・丁酉役における被慮朝鮮人の刷還問題について」上(『朝鮮学報』、第29輯)

—————1965. 05b「壬辰・丁酉役における被慮朝鮮人の刷還問題について」下(『朝鮮学報』第34輯)

神田喜一郎1949. 04「朝鮮と雨森芳洲」(『世界人』世界人社 通号7)

高橋公明1982. 08「外交儀礼よりみた室町時代の日朝関係」史学会編『史学雑誌』(91編、8号) 山川出版社

村井章介1988. 01「中世人の朝鮮観をめぐる論争」(歴史学研究会編、『歴史学研究』通号576) 青木書店

李元植1995「新井白石と朝鮮通信使」日本思想史編集『季刊 日本思想史』(通号46) ペリカン社

## IV. 刊行資料

国書刊行会編1977『新井白石全集 第3巻』国書刊行会

日韓共通歴史教材製作チーム編2005『日韓共通歴史教材 朝鮮通信使—豊臣秀吉の朝鮮侵略から友好へ』明石書店

(ラ イギュ:アジア文化学科 講師)

大国主義への序曲  
—江戸時代の朝鮮表象に焦点を当てて—

羅 義 圭

A Prelude to Grand Power Chauvinism  
—Focusing on the Representation of Joseon Dynasty during the Edo Period—

Euikyū LA

筑紫女学園大学  
人間文化研究所年報  
第30号  
2019年

ANNUAL REPORT  
of  
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE  
Chikushi Jogakuen University  
No. 30  
2019